

加藤九祚さんと石巻 大島幹雄

二〇一四年二月二日、石巻で加藤九祚氏の講演会「初めて世界一周した日本人」があった。三日前に降った雪が三八センチも積もり、九一年ぶりの積雪となった中、講演会にはたくさんの方が押し寄せた。なかには京都・東京・秋田など遠路から駆けつけた方もいた。

江戸時代ロシアに漂流し、世界一周し帰国した石巻の若宮丸漂流民の壮大な旅を、シベリア学者ならではの視点も交え迎った著書「初めて世界一周した日本人」は、この会を主催した石巻若宮丸漂流民の会にとって、大きな指針となっている。大槻玄沢から「野陸無識の舟子」と愚弄され、歴史の奥底に埋もれてしまった若宮丸漂流民の足跡を掘り起こし、自らの抑留体験を重ね合わせ、共感を込め、慈しむように彼らの運命を迎ってくれたのだ。加藤さんにとって石巻は、シベリアにつながる特別な思い出が残る地である。

一九四四年春、加藤さんは陸軍工兵第二連隊の一兵士として、北上川の河口で渡河の訓練を受けている。苦し

「私はどこで死んでもいいと思っています。周りの人には迷惑かもしれませんが、飛行機の中で死んでもいいと思っています。私が書いたあの本のおかげで、こうして皆さんとお目にかかって話ができるなんて、なんて幸せなんでしょう。ほんとうにありがとう」と二時間に及ぶ講演を締めくくったとき、満場から拍手が湧き起こり、しばしそれはやむことがなかった。

このあと加藤さんは石巻への思いを尋ねた質問に答えるかたちで、ある秘話を明かしてくれた。

「忘れられない思い出があります。山口から出てきた兄がこのままお前も戦場にいけば、明日知れぬ毎日になる。女も知らないで死ぬのはあまりにもかわいそうだと行って、夕飯のあと、女郎屋に行つて来いってお金をくれたのです。兄と別れて女郎屋に行きました。女が支度をするのを待っているとき、みじめな気持ちになってきてね、そのままそこを出ました。そしたら女の人があとを追いかけてくるんですね。お客さん、お金、お金って。なにもしないから返すっていうんですね。もちろん私は受け取らずに走って帰りました」

北上川の土手を逃げるように走る加藤さんを追いかける女のゲタの音が聞こえてくるようだった。弟を思う兄の気持ち、逃げるようにその場を去ろうとした加藤さん

い訓練に加えて、下痢に苦しめられ、辛い日々を送っているとき、兄がはるばる宇部から訪ねてくる。加藤さんはこのときのことをこう振り返っている。

「この兄は私にとって育ての親のような存在であり、言葉ではとうてい言いつくせないほどの恩を受けた。うれしかった。私は外出許可をもらって、兄といっしょに石巻の町に出、どこかの食堂で夕食を食べた。楽しいひとときであった。この石巻での出会いが私たち兄弟の今生の別れとなった」

それから七〇年の歳月を経て、思い出の地石巻で加藤さんは「人生そのものが漂流といえるのではないでしょうか」とゆっくりと語りはじめた。前半は漂流民四名を連れ長崎に來航した使節ニコライ・レザーノフの愛と死の物語を中心に、後半は自らの半生を振り返り、シベリアへの思い、人生における出会いの不思議さ、学問への限りない愛を淡々と語る加藤さんの話に私たちは魅了されていた。

の思い、そしてお金を返そうと追いかける女の気持ちが続み合う、なんとも切ないエピソードではないか。ロマンスト加藤さんは、この女性の気持ちをしっかり受けとめていた。ここに加藤さんの石巻を想う原点があったのかもしれない。

大雪が必死に隠そうとしていたのにもかかわらず、津波で何もなくなった荒れ果てた浜辺の風景をじっと見る加藤さんのまなざしは寂しげだった。ただどん底から這い上がり、いつもニューを求めていた加藤さんのことだ、その視線の彼方にきつと未来をとらえていたはずだ。去年私は「石巻学」という雑誌を創刊したが、「石巻住民が誠実で親切であることを身にしみて知った。あれから七十余年、私は今もその思い出を大切にしている」と創刊号にメッセージを寄せてくれた加藤さんは、「初めて世界一周をした日本人」のあとがきで、漂流民と石巻に向けてこう呼びかけている。

「彼らが死ぬまで恋こがれた石巻よ、……彼らはあなたの子として恥ずかしくない一生を終えたはずだ。私は彼らとともに叫ぶ。石巻よ永遠なれと」

加藤さんのこの「石巻」への思いを、私たち石巻の間は決して忘れない。